パラドックス戦争 下

ドゥームズデイ

大石英司
Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　安田忠幸

目次

第九章　フェルミのパラドックス　11
第一〇章　ＮＧＡＤ戦闘機　41
第一一章　砂嵐　68
第一二章　大和碓　96
第一三章　アップロード　122
第一四章　カリスト探検隊　152
第一五章　ドゥームズデイ　177
第一六章　作者不詳の物語　203
エピローグ　214

登場人物紹介

【日本】

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平　陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

原田拓海　三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

畑友之　曹長。分隊長。コードネーム：ファーム。

高山健　一曹。分隊長。コードネーム：ヘルスケア。

大城雅彦　一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

待田晴郎　一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

田口芯太　二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実　三曹。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

吾妻大樹　三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〈姜小隊〉

姜彩夏　二佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。

漆原武富　曹長。小隊ナンバー２。コードネーム：バレル。

福留弾　一曹。分隊長。部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

井伊翔　一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

〈訓練小隊〉

甘利宏　一曹。元は海自のメディック。コードネーム：コブラ・アイス。

各務成文　三曹。新人隊員。母校の大学レスリング部の教育補助要員。コードネーム：フォール。

峰沙也加　三曹。新人隊員。特技は山登りとトライアスロン。コードネーム：ケーツー。

花輪美麗　三曹。新人隊員。北京語遣い。母は台湾出身。コードネーム：タオ。

駒鳥綾　三曹。新人隊員。特技は護身術。コードネーム：レスラー。

瀬島果耶　士長。新人隊員。〝本業〟はコスプレイヤー。コードネーム：アーチ。

《水陸機動団》
司馬光　一佐。水機団の格闘技教官兼北京語講師。
仲田栄光　一尉。小隊長。

●海上自衛隊
〝もがみ〟（五五〇〇トン）
玉置憲太郎　海自二佐。艦長。
谷崎沙友理　三佐。副長。

●航空自衛隊
・総隊司令部
五十嵐潤　空将。総隊司令官。
倉崎昭治　空将補。防衛部長。
市来夕貴　一佐。情報課長。

・航空支援集団
《第一輸送航空隊》
別府克彦　空自一佐。副司令。

●神奈川県警
柿本君恵　警視正。警察庁サイバー犯罪対策班班長。
佐渡賢　警部。青葉署署長時代の柿本の部下。

●某大学
姉川祐介　教授。専門は生体工学。柿本の大学時代の恩師。
三原賢人　准教授。BMI（ブレイン・マシン・インタフェース）の新鋭、電子光学と生物学の博士号を持つ。

●その他
原田萌　原田の妻。旧姓名は、孔娜娜／榎田萌。専業主婦だが、実は天才科学者。

剛（クオン）　ベトナム人の男の子。
高松蔵之介（たかまつくらのすけ）　博士。元は天才脳外科医。脳科学者へ転身後、研究の世界から退く。

【中国】

●遼寧省人民警察東京出張署
周宝竜（ヂョウパオロン）　一級警督（警部）。署長。半年前に来日。

●人材スカウト会社
賀宇航（ホーウーハン）　博士。精華大学出身の理学博士。

【アメリカ】

●空軍
トミー・マックスウェル　空軍大佐。魔術師（ソーサラー）ヴァイオレットとは旧知。
・第５空軍
レイモンド・スピッツ　空軍中将。司令官。
《第 35 戦闘航空団》
ポール・サンダー　空軍大佐。参謀長。ＮＧＡＤに精通。
・第８空軍
《第 509 爆撃航空団》
コービン・ライリー　空軍少佐。第 13 飛行隊副隊長。
カーラ・スワンソン　大尉。右席兵器システム担当士官。
・第 11 空軍
《第３航空団》
オースティン・カミムラ　空軍中佐。第 90 戦闘飛行隊隊長。ＴＡＣネーム：カミカゼ。

●海軍
レベッカ・カーソン　海軍少佐。魔術師（ソーサラー）ヴァイオレットの秘書で、戦闘機パイロット。

●国家安全保障局言語学研究所

サラ・ミア・シェパード　博士。ＡＩ言語学者。

●エネルギー省ペンタゴン調整局

魔術師（ソーサラー）ヴァイオレット　ミッション・リーダー。本名不詳。左腕に義手。〝六〇〇万ドルの腕を持つ女〟の異名を持つ。

【火星】

カーバ・シン　博士。ミッション・コマンダー。

アラン・ヨー　博士。メカニック・ディレクター。

リディ・ラル　博士。パイロット。進化生物が専門。医師の博士号も持つ。

アナトール・コバール　博士。パイロット。元はエジプト文明とマヤ文明を専門にする考古学者。

トーマス・ワン　エンジニア。火星で育った第一世代。工学博士号に向けて勉強中。

ムケッシュ・アダニ　世界の大富豪〝セブン・リッチ〟の一人。

パラドックス戦争　下　ドゥームズデイ

第九章　フェルミのパラドックス

医師であり進化生物学者でもあるリディ・ラル博士と考古学者のアナトール・コバール博士は、都合二年半、留守にした火星へと戻ってきた。

ラル博士は、地球での休暇や、あれほど嫌がった講演旅行をそれなりに楽しんだ。背中がぱっくりと開いたドレスにも、どうにか慣れた。心ときめく出会いもあったし。コバール博士は、アフリカでの発掘作業に参加して大いにリフレッシュした。

地球は、この三年間、火星はロゼッタ渓谷遺跡での発見のニュースに沸いた。明らかに生物と思しき遺体を発見し、最初は何の道具だかわからなかったが、亜空間通信装置である遺物の発見と解明にも沸き返った。だがそれが生物なのか機械なのかの判別はまだ出来ていなかった。単に、超光速通信機能を持つだけなのか、ある種のワープ機能も備えているのかもと期待する人々もいた。

〝オカリナ〟と呼ばれたその物体は、似たような遺物が地球上でも発見されていた。機能はとっくに死んでいたが、ある種の宗教的遺物として扱われていた。

地球からの帰還も月経由で、ホーマン遷移軌道を使い三ヶ月で火星に戻ってきた。同じくホーマン遷移軌道を利用しての火星観光ツアーがピーク

となり、富裕層を乗せた船が何隻も火星へと飛び立った。火星側では、彼らを受け入れるために、わざわざ臨時のホテルをレゴリスで作り、従業員（メイド）ロボットが地球から送り込まれたほどだった。

火星や月での人工物は、九九パーセント、現地で手に入る土壌を基としていた。

火星には、ガリレオ・シティという街があり、今は千人の〝火星人〟が暮らす。そのほとんどは、一方通行で、地球に還る意思のない人々だった。

氷床探査中のロゼッタ渓谷で、深さ二〇〇メートルの谷底に人工的に作られた遺物が発見されたのは今から十数年前のことだった。

発掘計画が慎重に立てられ、地球から大量の資材が打ち上げられ、発掘基地となるサイト・αが建設された。地表から二〇〇メートルを降りるエレベータが建設され、自然の溶岩チューブを利用したらしい遺跡に入るためのエアロック構造が整備され、ようやくそこに人間が入ったのは、四年前のことだった。

奥まで四室ある人工的な空間は、オカリナが発見回収された第3室まで発掘作業を終えていた。

いくつかの特徴的な発見はあったが、コップや干からびたパン屑、何かの装飾品があったわけではない。基本的に無機質で、住人が引っ越す前に大掃除したような感じの空っぽな空間だった。

だが、最奥の第4室だけは違った。数千年単位の経年劣化により、第3室までは、レゴリスで作られたテーブルも壁も崩壊していたが、ドアで仕切られた最奥の部屋だけは、ほぼ原型を留めていた。塵も積もっていない。

その壁の人体に沿ってくりぬかれた窪みには、人間がロボットと認識できる二体の物体が、ドアの窓から確認できた。デザインは少し野暮ったいが、二本の脚と、二本の腕、そして頭部があった。

渓谷の地表面から二〇〇メートル降りたコールド・トラップと呼ばれる凍り付いた地面の上に、作業小屋が設けられている。オカリナ研究のために地上に作られたサイト・βに続いて、ここはサイト・γ（ガンマ）と名付けられた。ラル博士らが不在の間に整備されたのだ。エアロックはもとより、空調を含む生命維持システムからトイレまで設ける必要があった。

休憩室ひとつ作るだけでも大仕事だった。だいたいの構造物はレゴリスとプリンターで作れるが、空調システムにはまだ多くの金属パーツや特殊バルブを必要とする。そのかなりを地球からの輸送に頼っていた。

ラル博士らが不在の間、進んだのはその建築作業のみだった。アダムとイヴと名付けられたプールに入った生体の研究はそれなりに進んでいたが、どうやら知的生命体ではなさそうだという結論で、科学界の見解は一致を見ていた。

ラル博士が最初に見立てたように、それは生体シンスなり、ある種の奴隷生命体だろうと思われた。人工的に開発された生命体で、簡単な命令だけをこなせるペットみたいなものだろうと。

硬い骨格は持たず、脊髄に類するものまで軟骨で形成され、脳、耳や口はない。眼があるだけで、内臓組織も持たない。栄養は自分の肉体そのものから摂取し、脆弱な筋肉組織で動く。恐らく一週間、もしくは一ヶ月行動し、痩せ衰えて行動不能になったら、プールに入って身体はいったん溶解。栄養素のスープの中で、また一から同じ形態で成長する。その繰り返しで作動するのだろうと推測された。あの種の自己複製マシーンだ。

制御系のコンピュータの残骸が発見されなかったことから、その辺りまである種のバイオ・コンピュータ、いわゆるオルガノイド知能として自己

生成されていたのではと思われた。
その研究をリードしたのは進化生物学者のラル博士だった。
やがて人類も、同様の生体を家畜のように生産して利用するようになるのか？　という問いに、ラル博士は、倫理的な問題は常に付きまとうので、人類社会がそうなるかどうかは疑問だと答えた。
何より、人類は今や、老人のシモの世話からセックスの相手までやってのけるシンスを手にしている。シンス相手の婚姻も容認されている。彼ら彼女らは、二〇世紀のＳＦ作家たちが予測したように、人間と全く区別は付かなかった。幸いなことに、彼らはまだ人類に反旗を翻したりはしていない。
人間は、産院で管理される、より安全な人工子宮で生まれるようになった。それでは味気ないという人々が、妊婦を模したシンスを欲した。そのシンスの中に人工子宮を作って、その中で胎児を育てたいというのだ。だがそれは、いまだに母胎で子供を産む女性への冒瀆だという反対運動に遭っていた。
ラル博士は、ある種の原理主義運動から批判のターゲットにされていたが、気にはしなかった。自分は人類のあるべき姿を説く立場ではなく、単にこれから起こるだろうことをただ予測するだけだ。
一方で、オカリナの解明はほとんど進んでいなかった。いかなる非浸潤性検査の電磁波も透過せず、肉眼では見えるのに、可視光センサーに映らないという奇妙な現象も起こっていた。ダイヤモンド・カッターで削れないほどその表面は硬く、これが生物なのか機械なのかすらわからない。
月と火星の超光速通信を可能としたことから、ある種の亜空間的存在だろうとは思われたが、そ

もそも、この時代になっても、亜空間を理論的に説明することが出来なかった。

本来なら最大二〇分以上のタイムラグが発生するはずの地上と火星間で、リアルタイムの双方向通信が出来るのは魅力だったが、使いすぎるとやがてエネルギーを失うだろうという警告のもとに、通信機としての利用は禁じられた。

国連に代わって地球を統治するようになったカンパニー評議会は、このオカリナの研究に関して、このまま続行すべきか、人類社会がもう少し進化して、その謎の解明が可能な理論やセンサーを開発できる日まで、いったん研究を封印すべきかの議論を始めていた。

第4室に置かれた二体のロボットは、人類の審美眼からすれば、一九六〇年代のアメコミに登場しそうな、野暮ったく退屈なデザインだと酷評されていた。

ラル博士らが地球に降りている間に、旧約聖書から取って、〝ヨナ〟〝ヨブ〟と命名された。大スポンサーの一人であるユダヤ人富豪による命名だった。

最初に発見された生体がアダムとイヴ、そしてロボットの命名も欧米的宗教に毒されている。なぜブッダやムハンマドでは駄目なのか？　という批判が出たが、ムスリムはそもそも偶像崇拝を禁じており、仏教を信仰する富豪は、この時代僅かだった。

ラル博士は、つい昨日まで、そのネーミング・ライツを買った大富豪の相手をしていた。地球と火星を往復するには最低でも三年間近く掛かる。南洋のビーチでのんびりとしていれば良いものを、物好きな連中だった。

二人の博士は、宇宙服に身を包み、第1室の手前、ヘブンズゲートと名付けたハッチ跡のさらに

手前に立った。そこにエアロックが設けてある。
ヘブンズゲートはサイト・γと完全に密着していたが、遺跡は気密構造が失われているため、火星大気圧と同調されている。そこに酸素はほとんど無かった。
レゴリスの残骸が綺麗に片付けられた第1室、第2室を通ると、オカリナが発見回収された第3室にもう一つ、緊急用の退避カプセルとして小さなエアロックが設けられていた。
地球での深海作業用の減圧カプセルに近い。宇宙服を着た状態では、四つん這いにならなければ出入りはできなかった。だが中に入って酸素を満たせば快適だ。トイレもあった。
退避カプセルの構造材は、ほとんどがレゴリスで作られている。他に必要なパーツは、ガリレオ・シティで使用頻度の低い箇所から持ってきた。
火星上のあちこちに、同様の緊急避難用エアロックが置かれていた。
二人は、そこで右手に提げた酸素タンクを足下に置いてホースを解除した。エア供給が自動的に背中の生命維持装置に切り替わる。
ハッチというかドアの構造は地球のそれと同様、スライド式のドアだった。だが、さすがにここだけはすでに一部が壊れて固着している。
室内の大気圧は外と同じ。エンジン・カッターで、あちこちすでに切れ目が入れられている。後は上部を切断してドアをこちら側に引き倒すだけだ。ドアを撤去したら、今夕日没前に、作業用の仮設ドアを設置できるよう、すでにフレームが設置されていた。
最後に、コバール博士がエンジン・カッターを持った。強力なバキュームホース付きで、舞い上がる埃を吸い取りながら上部を切り取っていく。
作業用人型ロボット二体が、それぞれ腕を4本

出して、扉が倒れるのを防いでいる。
　コバール博士がエンジン・カッターのスイッチを切り、少し脇へと退いた。窓ごと切り取られたドアがゆっくりと外され、ロボットが抱えて後ろへと下がる。室内に埃が舞うのを心配したが、幸い大丈夫な様子だった。
　ガリレオ・シティで生中継を見守る全員が席に着くまで、二人はその場で五分ほど待たされた。
「リディ、先に入るかい？」
「もう十分よ。たまには貴方がその栄誉を受けて頂戴」
「了解。今回は、インパルス攻撃がないことを祈るよ」
「これだけ部屋が綺麗だと、ロボットの状態も悪くないはずよ。もし人感センサーが生きていたら、私たちが部屋に入った途端、ロボットが起動するかも知れないわ」
「遺跡の中で銃をぶっ放すのは感心しないな」
　万一の事態に備えて、武装した宇宙海兵隊員二名が待機していた。もしロボットが起動して襲ってきたら、対物狙撃ライフルで破壊するよう命じられていた。
「お二人さん、そろそろ始めよう。地球への生中継も始まる」
　サイト-αから、その探検の指揮を執るメカニック・ディレクターのアラン・ヨー博士が呼びかけて来た。
「アラン、本来なら、貴方もここにいるべきよね。機械のことは貴方が専門なんですから」
「そうしたいのは山々だが、こういうことは、一歩下がって冷静に観察できる立場に留まった方が良い。でないと僕はそこでヘルメットを脱いでロボットにキスしそうだから。二人ともカメラは良好、鮮明に映っている。ゴーだ！――」

二人は、そこで一分間ほど深呼吸して呼吸を整え、酸素残量を確認した。まだ二時間は活動できる。宇宙服の中は小宇宙だ。湿度も温度も完璧に管理されて快適に保たれているが、いかんせん重たい。宇宙服だけで、エベレスト登山ほどの装備重量になる。

緊張を強いられる作業は一時間が限界で、発掘に当たる考古学者たちも、一時間作業したら、サイト-γまで戻って一時間の休憩を取ることが義務づけられていた。

ラル博士は、コバール博士に続いて部屋に入る直前、サイト-αに呼びかけた。

「アラン、解説はそっちでやってくれる？　私とアナトールの会話はたぶん、凄く微妙なものになると思うから」

「問題無い。それはガリレオ・シティでやってくれている。でも録音としては残るから、そのつもりでいてくれ」

「ええ。わかっています。今度は、オカリナが大人のおもちゃに似ているなんて言いませんから」

コバール博士が右手にランタンを持って部屋に入る。続いて、ラル博士は、先端にランタンが付いた三脚を持って入った。コバールは部屋の左側隅の床にランタンを置く。ラル博士は右側にそれを立てた。それで死角はほとんど無くせる。その上で、二人は、それぞれ小さなマグライトも手に持った。

マニュアル通りに二人は行動した。コバール博士が、ロボットが収納された側の部屋の左半分を、ラル博士が、テーブルが置かれた右側半分を調べる。奥にはラックがあり引き出しもあった。

「これ、ライブなんでしたっけ？」

「いや、万一に備えて一分間のタイムラグが設けてある」

とヨー博士が応じた。
「とりあえず、引き出しを一つずつ開けてみます」
テーブルの上には、何も置かれていなかった。その下にも何もない。まさに引っ越し作業が終わった後の部屋だ。ロボットが置かれていることを除いては。ラル博士は、引き出しをゆっくりと手前に引っ張ってみたが空だった。
「たぶん、全部の引き出しが空ね。埃が僅かに積もっている程度です……。アナトール、そっちはどう？」
「ロボットの周囲を観察している。ケーブル類は見当たらない。電源の類いも。充電装置も見当たらない。中に原子力バッテリーでも仕込んでいたのかな」
「恐らく、骨格自体がバッテリーだろう。進んだ技術なら当然そうする。別にバッテリーパックを腰に装着するようなことはしない」
とヨー博士が呼びかけてきた。
「ではそろそろ、ロボットに掛かろう」
二人は、壁の中で直立している二体のロボットの前に立った。直立はしているが、地震に備えたのか、窪みには斜度があり、上に行くに従って深くなっている。ロボットは恐らく二〇度近い角度で、壁にもたれ掛かっていた。
「しかし、何というか……。酷いデザインね」
「そんなことより、これが人間が描くロボット像そのままであることに留意すべきだ。大腿骨に膝、脛、踝、足。人間そのものだぞ。手の指は四本だが、関節の構造まで霊長類と同じだ。まるで、宇宙人が一九六〇年代にタイムスリップして、ハリウッドのスタジオから盗んできたロボットを、何かの悪戯目的でここに置いたとしか思えない」
「しかもダサダサ……。これがＳＦ映画だったら

絶対にあり得ないシチュエーションよ。きっと監督は、デザイナーに、スタイリッシュでサイバーなロボットのイラストを要求する場面よ。なのに……、これ、まるでサイバーマンね……」

「サイバーマン？」

「そう。二〇世紀から続くイギリスＢＢＣで放映されていたＳＦドラマ〝ドクター・フー〟に登場する敵キャラ。古典ＳＦだけど。ドゥームズデイで番組は終わったけれど、あのドラマの登場キャラって、子供向けだから、わざとダサく作られていたのよね。こんなのを地球に持ち帰って、予備知識無しに宇宙人の遺物ですと言っても、誰も信じないわよ」

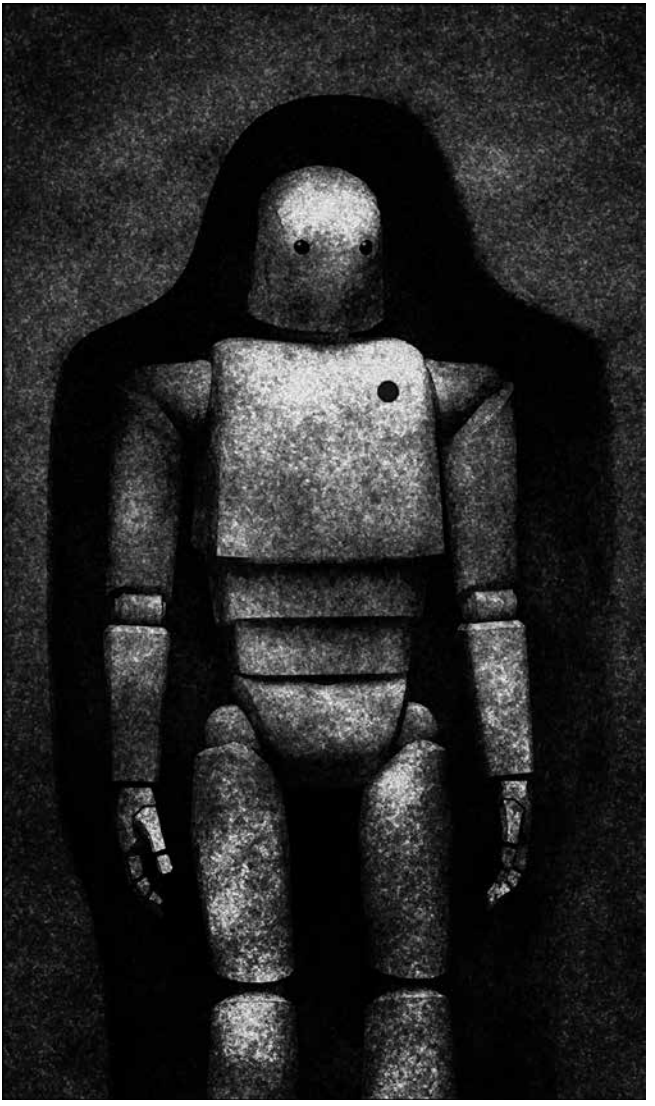
「これさあ、地球ではもう、ぬいぐるみとか売られているんだよね？」

「文句は言えないわ。その版権で、エアロック一部屋分くらいの予算は確保出来たかもしれないから。ロットナンバーとかどこかに無かった？」

「無いね。製造番号や文字の類いは一切無い。そっちは無かった？」

「いえ。今の所ないわ。この知的生命体は文字を持たなかったの？」

「その可能性はある。文字は、文明進化の必須のツールではないという学説は昔からある。文明が進化すれば、文字は消えるだろうという説もある。たとえば、中国で生まれた漢字は、表意文字的要素を含むが、あまりにも画数が多いことで非効率だとの批判を受け、大幅に簡略化された簡体字へと進化した。昔のままの漢字を最後まで使ったのは日本人だけだった。彼らは、変化を嫌う民族だったからね。ラテン語は、結局はもっともシンプルな英語のみが生き残った。でもエスペラントは流行らなかったね。あれは効率的な言語だったが。いずれにしても、人間は本を読まなくなったし、



その必要も無くなった。マシン言語は、何がしたいかを問えばコンピュータが勝手にプログラムを書いてくれる。今は音声で互いの意志を伝え合っているが、いずれはテレパシーや脳プラント化された通信デバイスで、以心伝心の時代が来るだろう。言語以外の思考方法を身につける時代もくる。もしこれらのロボットがプリンターやロボットによって製造されたとしたら、パーツにロット・ナンバーを振る必要は無い」

ロボットの身長は二体とも一五〇センチだ。二体のロボットにデザイン上の差異はなく、明らかに量産品だ。表面の質感は金属質で、色や模様はない。この文明の持ち主は、とことんまで装飾や芸術に関心がなかったらしい。

「アラン、このロボットのご感想は？」とコバール博士が無線で尋ねた。

「一言で感想を言うなら、これはフェルミのパラドックスだな。機械工学的に言えば、このロボットは間違い無く地球製だ。それも一五〇年は昔のそれだろう。二足歩行動物が進化すれば、どれも似たような姿になるという学説はあるにはあるが、関節の数まで同じになるものなのか？　両眼は顔の正面を向いているものなのか？……」

「何でしたっけ？　そのフェルミの何とかって……」とコバール博士が聞いた。

「地球外生命の可能性と、分けても知的生命体との接触に関するパラドックスのことよ。こんなにも宇宙が広く、あちこちに知的生命体が誕生しているとしたら、地球人類はなぜそれらと接触していないのだ？　実はとっくにわれわれは彼らと接触しているのではないか？　いやそもそも宇宙は広すぎるからすれ違うことは無いのだという、パラドックス論争ね」

アランに代わってラル博士が説明した。

「仮にだ、お二人さん。このロボットが地球外の知的生命体によって作られたとしたら、恐らくその地球外生命体は、地上を軌道上から眺め、棍棒で殴り合っているネアンデルタール人とホモサピエンスを見付けて、そのデザインを真似たロボットを作ってみたんだろう」
「それには賛成出来ないわ、アラン。このロボットには耳、鼻、口もない。センサーとしては、両眼の半導体素子だけよ。もしヒトに似せるなら、そこまでするでしょう。あるいは、アダムとイヴで創世の実験をしていたのかも知れないけれど。いずれにしても、このデザインは、全く頂けないわね……。SF映画の脚本家に、こういう筋で物語を書けと命じるプロデューサーがいたら、みんな頭を抱えるわよ。このロボットには、いかなる合理性もない。あまりに安っぽくて見窄(みすぼ)らしく、退屈だわ。一世紀前に作られたホンダのアシモはまだ可愛かったし、ボストン・ダイナミクスのアトラスには未来を感じさせるものがあった。なのにこれは……」
「サイバーマン？」
「なんだか、それを言うと、サイバーマンのデザイナーに失礼かもと思えるほどよ。とにかく、この知的生命体にはデザインのセンスはない。たぶん、芸術とは無縁な種族だったのかも」
「考古学者として、それは賛成出来ないな。技術の発達は、芸術性とセットだ。芸術的センスがなければ、技術は進化しない。レオナルド・ダ・ヴィンチがそうだったように」
「コバール博士、次のステップに取りかかろう。マリンコを待機させる」
　破壊されたドアの外で、二人の宇宙海兵隊員が、膝撃ち姿勢で腰を下ろし、いかつい対物狙撃ライフルの薬室に弾を一発送り込んだ。

幸いにも、ここ火星で銃が発砲されたことはない。だが、暴動に備えて警察は火薬式の銃も装備していたし、宇宙海兵隊は、カンパニー所属とは言え、消防やレスキューなど、多方面で危険を冒して活躍していた。

ラル博士が部屋の端まで下がってロボットから距離を取った。何事も起きないことを願うしかなかった。オカリナ発見時は、起きないはずのことが起きた。

あの時、ラル博士がオカリナに触ろうとした瞬間、後にインパルス攻撃と名付けられたショック現象が起こった。ラル博士とコバール博士はその場で気を失い、それを生中継で見ていた火星上の人々全員に、悪夢のようなフラッシュ現象が発生した。核爆発や飢饉など、人類の負の歴史が一瞬脳内で再現されたのだ。

それが起こったメカニズムは、今も全く未解明なままだった。何かの警告だろうということは皆、なんとなく理解したが、それがどういう意味かまではわからなかった。この後に、何らかの現象や症状が現れるのか……。

コバール博士が、右手にマグライトを持って「では瞳孔反射テストを開始する」と告げてから、ロボットの一体の両眼部分にその眩しい光を当てた。

光を当てる角度を少しずつ変化させながら、ロボットの反応を見た。もしこれがある種のスリープ・モードにあり、外的刺激に反応して目覚めるようなら、何らかの反応があるだろうと思われた。博士に襲いかかるなり、眼からレーザー光線でも出すなり。

ロボットの両眼は、人間の眼球ほど大きくは無い。だが覗き込むと、半導体の受光部の前面に、保護用のガラスやレンズ構造があることが見て取

れた。恐らく可視光だけではなく、赤外線も見えるはずだ。
　ロボットは裸の状態だが、左胸のやや肩に近い所に、ある種の光学ライトのような丸い部分があった。直径からしてレンズではなく、センサー（眼）用のライトだろうと推定されていた。
　コバール博士は、五分ほど費やして、二体のロボットのあちこちにライトを当ててみた。もちろん反応は無かった。
「フェーズ２テストに移る」
「了解。環境マイクは入っている」
　ライトで、肩の部分を少し叩いて見る。
「叩いた感じでは、プラスチックや樹脂というより、金属に近い感じだな」
「同感だ。こっちで波形も見ているが、金属の反響音に近い。内部にはある程度の空洞もあるようだ」
　コバール博士は、続いて頭部から順に、コツコツと叩いて膝の辺りまで試した。
「続いてフェーズ３テスト」
　ドア口に立つスタッフから、内視鏡レンズを受け取った。コバールの専門分野だった。コバール博士は、医師のように自在にそれを使いこなす腕を持っていた。
　映像をヘルメットのゴーグルに投影し、内視鏡をロボットの背中側に入れた。
「特に、壁側と接続している部分は見当たらない。背中にはポートの類いも無さそうだ」
「こっちにも見えている。ここで充電しているとしたら、非接触型の充電機能だろうな。だがおかしいな。アクセス・パネルが見えない。きっと背中側にそれがあると思ったのだが。すると、このロボットの内部にアクセスするにはどうすれば良いのだろう……」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。